宗門僧侶教育（法器養成）を考える

――綜合一貫カリキュラム教育試論――

新間智照

はじめに

わが教団は布教伝道教化を生命とするが、特に現代において「青少年教化」にどう取り組むかが、重要な課題とされている。そしてその中でも、将来教団の中核となり布教伝道に挺身する後継者づくり――法器の養成――僧侶の教育育成――は、格別の重要さを持っていることは言うまでもないことである。

宗門の僧侶教育のありかたとして、もっとも基本の姿勢として次のことを主張したい。

1. **教育期間**は青年期にとどまらず、自学自修を含めての**生涯教育**である。
2. **教育形式**は集団教育の中においてさえ、師と弟子の一対一の触れ合いであり、相互に師となり弟子となる**相互研鑽**である。鋳型へのはめこみ作業ではない。
3. **教育内容**は広く基礎学の上に立って、祖書を学び**祖意を体し自らの使命を自覚**することである。

この基本前提に立って、教育制度が組み立てられなければならない。

現代の教育危機

もともと人間にとって教育とは、親が子に畑の耕し方を教え、魚の獲り方を訓練し、古来の伝承を伝え、身の護り方を体得させ、生活の全般を指導して、子の立場からいえば「生きかたを教わる」――、親の立

場からいえば「後継者を育てる」という営みであったろう。血の通った個人教育によって、内在する能力を引き出し形づけるものであった。

しかし社会が複雑になり、支配する者とされる者の差が開き、分業が進むにつれて、教育は集団化し、多様化する。集団化は人数場所時間を集約することによって効率はあがるが、一人一人の成長に即してでなく平均にならした教育にならざるを得ない。多様化は専門別・階程別に教育内容を細かく増やしてゆけるが、知識技術の切り売りとなり易く、生きること全体の総合した教育は失われる。

そして社会の全体として見れば、管理者となる者のための教育と、管理される者のための大衆教育と、コースが複線化し（戦前の日本では実にはっきりとしていた）、教育目的の中に、人間を管理し社会を管理することが含まれてくる。さらに管理（制度といってもよい）ということについていえば、集団化し多様化することは複雑な制度を必要とするので、その制度の維持管理、その制度の中の人間管理が教育そのものより重視されるという弊害も生じ易い。

現在の日本の教育は、それらの集団・多様・管理の欠点が複合して、救いようもない危機にある現状を示している。多くの親は自分の生きて来た道を子供に望まず、管理者のコースに子供を送りこもうと狂おしく考える。そして子供は、すでに親の手より遠い。幼稚園より大学まで生活の主要部分は学校にあり、しかし家にあってさえ、親の声よりもテレビ・ラジオの声の方が身近い。受験地獄。落ちこぼれ。生きることの空しさが小中学生の心を促えるほど、教育は崩壊している。

宗門もまた、そういう日本の社会の中の社会として、教育の危機にさらされている。その問題点を取り出すに当って、宗門の教育の歴史をふり返ってみよう。

宗門の子弟教育の歴史に見る

宗門の僧侶教育の歴史は、もっとも大まかに分けて、次の四期にまとめられる。そして現在は、第五期に入ろうとする時点にあると考えられるのであるが、各時期より今日の問題点をくみ取ってみよう。

1. 宗祖を師とする原点（宗祖在世期）

宗祖御在世の師弟関係に、私たちは制度以前の教育の原点を見ることができる。宗祖を師として親しく仕え、宗祖の口より親しく法義を学び、本化の弟子として育成せられた在世のお弟子がた。それより始って今日宗門五千の僧徒に至っている。

宗門僧侶にとって、帰依すべき本師は釈迦牟尼仏である。僧宝の人師は高祖日蓮大菩薩である。得度の「師僧」というも、行学の「師匠」というも、宗祖の前には能所同じく本化の弟子であって、ただ私たちを宗祖のもとへ手引きしてくださるによって、「師」とは名づけるのである。

深い観心における「所化以て同体なり」の次元においてでなくても、三世にわたる相互関係からいえば「互いに主となり伴となって」であって、師弟の上下関係を絶対化することが「僧風教育」だという傾向は反省されなければならない。師恩を知り師恩に報いるということは弟子の自主的な発動であって、師弟および先輩後輩の関係が、身分として大げさに絶対化されることは、かえって反教育的であろう。宗祖を師とする――この原点に常に立ちかえらなければならない。

2. 宗祖へ導くための談所教育（鎌倉 - 室町）

子弟を宗祖のもとへ導く、といっても、師僧たちの宗義の理解には深浅があり、教育能力も同じではない。そこで宗祖滅後の教団では、各門流ごとに本山に僧徒を集め、すぐれた師のもとで集団教育をする試みが制度化されてくる。「談所」の設立である。

先駆的には一二九八年、日興師が重須に本門寺を建て、談所を設け、一三〇二年日頂師を学頭としたのに始るが、一三八九年平賀談所、以下身延・中山・比企・妙顕寺・本圀寺等、各本山に談所が設けられ、祖書が講じられるようになったのは、祖滅後の子弟教育の必然の制度化であった。

3. 学校として独立整備の檀林教育（室町末 - 江戸期）

研究・教育のシステムというものは、長期の見通しのもとに真理を求め教えるという、それ自身の性質によって、組織の行政府から一歩独立して安定しようとする。戦国の乱を経て、信長より家康に至る天下の統一と安定の時期に、教団でも独立の学校組

織ともいうべき檀林が続々と設立されてくる。

先駆的な役割を果したのは、堺妙国寺の油屋日珖師等により一五六八年始められた三光勝会（三年後に教育道場を建つ）である。

一五七〇年頃　下総　飯高檀林　開設

一五八〇年　京都　松ヶ崎檀林開設

この関東関西両根本檀林をはじめ、その後百年程は檀林の開設ラッシュである。上総小西・京都求法院・下総中村・身延西谷・京都東山・京都鷹ヶ峰・下総玉造・京都山科・京都鶏冠井・池上南谷・水戸三昧堂……等々と続き、本山の師資相続が学系（法縁）相続に傾き、僧侶の諸資格も檀林修学程度に応ずるようになって、今日の学歴学閥社会のはしりのようにも見えるが、現在の宗門のモザイク教育とちがって、一貫教程の実績をあげたであろう。

けれども、江戸中期より後期にかけて、檀林は制度として整備されるにつれて、形式化しマンネリ化してくる。そのカリキュラムは基礎学としての必修科目に天台学を重視しすぎたため、上級に至って天台の三大部、その後にはじめて宗乗の研究ということで、今日風にいうならば、学部では通仏教や天台だけしか講じられず、大学院に進んだ者のみが宗学を研究するという形であるので、結果としては多数の天台学徒と少数の宗学徒を生んでいたといえよう。

寮生活によって僧侶としての修行に勤め、作法心得を身につけるという一貫教育の長所も、後期には形式主義となり、学問よりも勤行や行儀作法が重視されるようになったという。

檀林の外、教団全体としても、外見は諸山繁栄を誇り、仏教書の出版も興り、説教・修法等の特定の布教法の修練も盛んになって来るのであるが、本仏を忘れた守護神信仰が盛行し、現在の宗門が抱えている布教・教育上の問題点の多くは、この期に根ざしており、明治～昭和の近代化の中でも清算克服されなかったといえよう。

4.機能分離の近代学校教育（明治　昭和期）

幕末より明治にかけての日本の近代化の波の中で、廃仏毀釈の試錬を通りながら、近代統一国家として作られてゆく市民社会の中では、宗門の教育機関も一般の学校制度に準じ合わせてゆかざるを得なかっ

た。宗門教育が近代化を果すために、得たものも、失ったものも、ともに大きい。

先駆者としては優陀那日輝師が一八三〇年頃、金沢に充洽園を開き、近代宗学の祖といわれるとともに、薩・鑑・修三師をはじめ維新の危機を乗り切る多くの英才を訓育したことは、あまりにも有名である。

一八七五年（明治八）年、新居日薩師により東京に日蓮宗大教院、地方八区に中教院が置かれ、大教院は大檀林・日蓮宗大学林・日蓮宗大学と改称を重ねながら、普通科も開設（明治十九年）、一九二四（大正一三）年には文部省大学令による立正大学となり、近代学校制度に適応して行った。

しかし、近代化の道は機能分離の道であった。かっては一つのコースをたどることが、例えば談所のある本山に住するとか、檀林の課程を修することが、僧侶教育の少くとも基本のすべてを一貫して含んでいたであろう。充洽園でも明治初期にも、それは志されていたに違いない。しかし近代学校としての立正大学の成立は、近代宗学の確立には力あっても、全人的な僧侶訓育の機能は失われてゆかざるを得なかった。現在立正大学のコースを以て僧侶としての基本教育が完備される、とは誰も期待していない。

いま私たちが僧侶になるには、用意された一貫システムに乗ってでなく、さまざまな教育機関をモザイクのように貼り合わせながら自分の道を作ってゆくのである。公立の小中学校で義務教育を受け、一部の少年は夏休みに僧風林（沙彌校）を一週間前後体験する。それは宗門教育の中で離れ島のように存在するのであって、飛び石にさえなっていない。僧侶作法を身につけたい一群は祖山の高校に入るが、多数は一般学校生活を求めて公私立の高校に通う。立正大学においては宗学のアウトラインを学び、さらに研究を深めることはできるが、それが直ちに信行・信解にはつながらない。師僧の多くは実父であって、自坊で僧侶教育は受け難く、宗立寮に入ったり、本山大寺に随身してようやく僧侶生活に慣れる。そして随身生活とは、実習的ではあるが、必ずしも充分に教育的であるとは限らないのである。僧侶教師になる全員が通る課程――つまり本来受くべき基

本教育は信行道場わずか三十五日。十人に一人がやっと布教研修所で六ケ月の訓育を受けられる。専門の修練を重ねたい希望者のみが、互いに教育の連繋はなくバラバラに存在する布教院・加行所・声明講習会等におもむく。

新興の教団ならば、思い切って統一した教育プログラムを実施できたかもしれないが、伝統的な教団が近代化を進めたとき、ついに統一したプランニングが困難なまま、時の流れと折り合って来た結果が、今日のツギハギ教育制度であろう。

綜合一貫したカリキュラム教育を

僧侶教育に一貫性と綜合性を欠くという、この重大な問題点は、明治・大正期より潜在したはずであり、それ故にこそ、一九三七（昭和一二）年それを補うための信行道場が開設されたのである。しかし、いかんせん、人間成長期の二十年（就学してから専門職業教育を一応卒えるまで）のうちの三十五日とは、時間の比率にすれば二百分の一の教育である。戦後も三十年を経て、僧侶の世襲・準世襲が七～八割（筆者の信行道場での調査）にまで定着した今日、僧侶教育の不完全さの問題が大きく浮かび上って来ているのである。

いまや次の時期に入らねば教団の活路はなく、また実際に新しい時期に入りかけているのである。本山談所期・檀林期・近代学制期に次ぐ時代が始まろうとしている。それは「綜合一貫カリキュラム教育期」であり、「教育綜合管理期」である。

この期の先駆は何か。各期にそれぞれ先駆的実践があった。だが綜合一貫教育の一例報告的実例はない。宗内の教育実践はすべて部分短期教育であるからである。僧侶教育に重点を置く祖山学園すら、それは過去の何ものかを失うまいとする努力ではあるけれど、現代に生き未来へ伸びる僧侶の、綜合的な一貫した教育とはなり得ていない。

これは一教育機関の問題ではない。教団全体を覆う計画の問題であり、しかも国家の学制、普通教育とも深く絡み合っている。既成の一つ一つの教育機関が充実すればよいのでなくて、教育全体の計画そのものを問い直す時期なのである。建設事業に例え

れば、大きなビルや道路を、それぞれ立派に建ててギッシリ並べればすばらしい都市ができ上るというものではなくて、その前に都市計画が必要だということである。

この意味を納得いただければ、いまや先駆の試みとは綜合計画の始動にあることが理解していただけよう。そして、まさに始動にある。「カリキュラム作成委員会」である。宗門の教化研究会議の中から、要望されて生まれたカリキュラム作成委員会は、まず法器養成の問題をとりあげ、綜合一貫教育の展望の下に、その基準点を信行道場にねらいを定め、道場読本と指導要領の作成を終えて、実施に入る段階に至っている。

自分が委員の一人だからといって、興師・珖師・輝師と並べてカリキュラム作成委員会を置くとは、自画自賛もいいかげんにせい、とお叱りを受けるかも知れないが、会の実体（委員）がすばらしいというのでなくて、その実動している方向が貴重な先駆なのである。委員だから我田引水しているのでなく、上記の教育制度の構造が見え出したによって、筆者はこの歴史を画する委員の仕事にのめり込んで行ったのである。

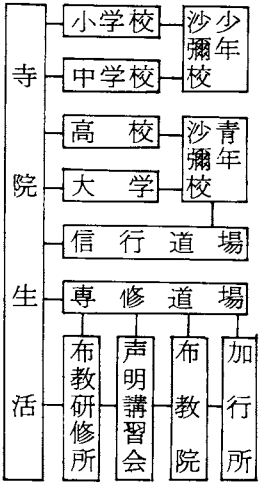
綜合一貫したカリキュラム教育を

綜合教育一貫制度とは、年少の沙彌から長老になるまでの生涯を貫く縦の線と、部門別専門別等の横の線と、縦横に僧侶教育カリキュラムのネットワークを張りめぐらすことである。どこを起点とし、どこを規準に考えてゆくのか。沙彌から積み上げても行けるし、到達点の「期待される僧侶像」から逆算してもゆける。だがカリキュラム委員会では、信行道場に規準を置くことになった。

なぜなら、現在の宗門では信行道場のみが縦にも横にも、すべての僧侶が集約される原点だからである。信行道場を出れば沙彌が教師に、所化が能化になる資格が与えられるという、僧侶生活の要であるし、地方のそれぞれの寺院・学校というバラバラの教育体験をした者が、一度ここへ集約されて同じ教育を受け、又その後は、それぞれ希望の修練コースへ散ってゆくからである。

したがって、信行道場のカリキュラムにまず手をつけることは、道場のみを独立完結した対象として考えるのでなく、そこから上下左右にカリキュラムの網を拡げてゆく、その基準点の設定である。

イメージ喚起のため一例を図示すれば、既存の教育体制プラスアルファの配置連結を考えて、これに綜合一貫カリキュラムの網をかぶせるのである。



ほんの一例であって、もっと異った組み合わせや制度新設もありうるのであるが、二三付記をする。

①現在の僧侶教育の問題点の一つは、師弟の間に教育的な緊張が弱まっていることである。相対してお経を教えよう、覚えようという雰囲気に乏しい。しかしこれは教育の場所を別に設定して補えるし、またそこから立ち戻って、寺院生活にまでカリキュラムを導入すればよい。

②次に、教団が出世間的な独立生活を維持できず、世間の学校制度や社会の影響力が大きく割り込んで来て、宗門教育が分断されている点がある。しかしこれに逆らって、昔の軍の学校のように閉鎖的な体制を作っても、それは世間智に乏しい思い上った僧侶を育てるだけであろう。学校や社会が、人間としての基礎教育をしてくれている面を生かして、ネットワークにとりこめばよい。

③第三点は、宗内の教育制度そのものが、教育責任よりも制度としての運用に気をとられすぎ、受ける方も「ここを出れば何の資格が得られる」という資格取得の手段としてのみ受け取りやすいということである。これも従来、制度を作りっぱなしで、教育の内容やその教程が充分検討されなかったためであろう。したがって、内容と他との連繋を作ってゆけば、既存の制度は生かせると思う。

④さらに現在の僧侶教育の弱点は、生活の場におけ

る指導の機会が少いことである。学校制度は学業と生活を分離しているので、しかも寺院が僧院でなく家庭化しているので、少数の寮生活者以外は、起居を共にして生活の中で訓育されるという機会をもっていない。道場三十五日ではあまりにも少いし、十五才～二十才の間に集団宿泊教育の機会を、できるだけ作る必要があろう。

訓育の三本の柱と序・正・流

僧侶教育に何を要求されているか、師僧や先輩の期待を集約し、どういう教科が必要かについて、「信行道場指導要領」では「訓育三部門」――三本の柱が考えられている。「要領案」の中の「三、訓育三部門の調和を常に考える」という項を抄記すると、

道場は「信行」が第一目的であるが、「法要所作」の習得や「寺院実務」の指導も要求されている。この三つが不足せず混乱せずに訓育されないと、教育効果があがらない。

(1) 信行の修練・信解の増進

もっとも重要であって、三十五日全期間を通じて、給仕・勤行・唱題行・読誦行・書写行・訓育講話等により、僧侶としての内面形成を深めるべく導く。

(2) 基本法要式・所作の習得

声明その他法要式の基本を学び、所作に習熟することにより、僧侶としての外形の威儀を整える。三十五日中、初期に集中的に教え、中後期に習熟させる。

(3) 布教師・住職としての実務の習得

道場の流通分ともいうべく、布教法・葬儀法事等法要実務・宗門組織の認識・宗教法人法の理解等、教師として住職として生活し布教するための知識・実技を習得させる。

以上の三本の柱は、カリキュラムとしては講師の都合等で前後するし、また一つの教科が三つの面を含むことも多いが、訓育現場では今教えていることが、「三本の柱の中のどれに主に当っているか」ということと、「他の二面についてどうつながりを持たせるか」ということを意識して、「鹿

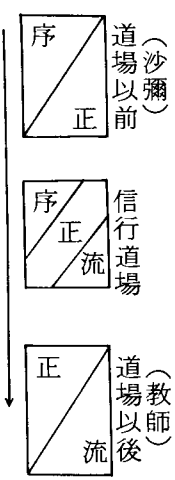
を追う猟師山を見ず」にならないように注意する。とあり、更に各条が詳説されている。

この三本の柱を、僧侶教育の内容として順序づけてみると、

1 基本法要式・所作の習得……いわば序分
2 信行の修練・信解の増進……いわば正宗分
3 布教師・住職としての実務の習得…いわば流通分

と考えることができる。だから道場五週間において、（序分）は第一週に集中して、以後は実習として二～五週に伸び、（正宗分）は第二～三週を中心であるが、読誦唱題訓話等一～五週の全体にわたり、（流通分）は第一～三週から引き起しながらも、中心は第四～五週に集中する、という教科配置が考えられるのである。

信行道場を座標の原点に置いた有利さは、僧侶教育全体にわたって、この順序づけを延長できることである。道場を正宗分中心と見るなら、道場以前の教育は序分中心、すなわち法要式所作の習得と、信行信解の準備段階（宗学仏教学の基礎の修学、要品程度読めるまでの修練等）が主要なカリキュラムとなる。そして道場以後は、生涯信行信解の増進をはかりながらも、寺院実務や布教法のより熟達が主要なカリキュラムとなろう。単純にモデル化すれば次図のごとくである。



この基本構造を確立しておけば、あとは細部にわたって、どのように現代の社会、現実の宗門に適応させ、きめこまかくカリキュラムと指導要領を打ち立ててゆくかである。

むすび

カリキュラム作成委員会の始動作業は、あくまで先駆段階に過ぎない。これからが宗門教育の新しい時期への改革が動き出さねばならない。制度上より見ても最低これだけは新設が必要というのは、「青年沙彌校」と「専修道場」であろう。いずれも必修

課程とすることが望ましく、ただし、既に修得している度合いにより日数やコースに差をつけたり、ある程度単位を選択できる余地が必要である。

先にも記したように、一五～二〇才の頃に一年以上の集団合宿生活を経験させることは教育効果が大きいが、信行道場以後は長期連続の集団合宿生活は必ずしも効果が上らない。むしろ短期研修のくり返しで、たえず布教現場と往復することと、個人の時間空間をあまり圧迫しない配慮が望ましい。

最後につけ加えるならば、制度とカリキュラムをどんなに整備しても、決定的なのは教育に当る訓育職員に人材を得るか否か、そしてその人たちの熱情と工夫にかかっている。筆者はかって斉藤喜博氏の島小での教育記録を読んで、人間の内側から引き出す教育が、小学校でもこれほど見事にできるのかと感動措く能わざることがあったが、仏性を引き出すこと、僧侶としての使命の自覚は、教育によって充分可能であると信じている。

はじめに記した僧侶教育の基本主張をもう一度のべる。

1. 教育期間は生涯教育である。
2. 教育形式は相互研鑽である。
3. 教育内容は祖意を体し自らの使命を自覚することである。